中国赴日留学生予備教育報告

３班(生命)担当　有坂文雄

８月１４日（日）に長春に到着し、竹中章郎先生の後を受けて翌日から後半の二週間を担当した。８月１５日（月)、前日に竹中先生と打ち合わせした通り、午前の１～２時限に竹中先生が教科書を使った最後の授業を行われ、３～４時限に有坂がパワーポイントを使って、自己紹介と「バクテリオファージの分子集合と感染機構」と題して研究の簡単な紹介を行なった。その日の午後から２６日(金)まで二週間、以下の内容で授業を行った。

（１）１２名の班員について

まず、学生に自己紹介をしてもらい、修士論文の内容についても簡単に説明してもらって彼らの仕事の内容を理解したいと思った。しかし、仕事については分野が多岐にわたり、内容を理解するためには多くの質問をする必要が生じて時間がかかりすぎることが分かったので、自己紹介では簡単な説明に留めてもらうことにし、修士論文の内容については「発表概要」の添削の際に立ち入って話を聴くことにした。

自己紹介を聴いて、学生によって日本語能力に大きな差があることが分かった。自分の意志をほぼ的確な日本語で表現でき、こちらの質問の内容もほぼ完全に理解して適切な返事ができる者もいたが、こちらからの質問の日本語をほとんど全く理解できない学生もいた。そのため、日本語がよくできる人の助けを借りてこちらの質問の内容を中国語で伝えてもらってから日本語で応えてもらうこともあった。発音に癖があるために聞き取りにくい学生も２～３名いた。

地方の農村出身の学生が２名いたが、他の学生の話では地方の農村からここに来られるような人は、１００人に１人という話だった。

学生の専門領域は多岐にわたる。参考までに１２人の修士論文の表題を記しておく：

１．フグ(Takifugu fasciatus)ＣＤ８αの性状解析
２．ユリに感染するウイルスのゲノム構造の解析とウイルス感染がユリにもたらす生理学的影響についての研究
３．プロテインキナーゼＣと卵母細胞の減数分裂の再開の関係
４．LaCit は卵巣上皮癌細胞 Hela でのアノイキスを誘導する
５．螟卵嚙小蜂 Tetrastichus schoenobii Ferriere の発育と繁殖に及ぼす温度の影響及び人工飼育の研究
６．稲上部節の伸長に関わる遺伝子の研究
７．昆虫病原線虫 Heterorhabditis bacteriophora-ZT の耐寒性と生存戦略
８．Sitagliptin 誘導体 26 種の合成とジペプチジルペプチダーゼⅣ（DPP4）に対する阻害活性の研究

９．キトサン分解酵素の高収量産生麹菌の研究
１０．微生物細胞表層へのディスプレー技術を用いた重金属汚染修復に関する研究
１１．ユリの抗ウイルスベクターの構築と形質転換の研究
１２．桔梗根抽出物のマウスに対する毒性の検討

（２）授業内容

私は竹中先生の後を引き継いで「発表概要」（以下「概要」）の添削と「発表練習」を行った。概要は、発表内容を十分に理解しないと適切な添削が難しいので、マンツーマンで行うことにし、一人の添削を行っているときは他の学生は同じ教室で自分の発表概要の見直しや、発表原稿の作成を行っていてもらうことにした。その場合、一人の「概要」を最後まで見ると添削に時間がかかりすぎ、待ち時間が長すぎると考え、「はじめに」「方法と考察」「結論と展望」に分けて、一つずつ直しては次の人の「概要」を見ることにした。３日目（１７日(水)）から「概要」の添削に取りかかったが、多くの「概要」はそのまま読んでも理解が困難だった。こちらの守備範囲もあるが、彼らの日本語による表現が不適切であるためである場合が多い。予想はしていたが、学生によって添削にかかる時間は大きく異なった。人によってはこちらの質問の日本語が分かってもらえず、ゆっくり話してもどうしても分からないときには、理解の早い数人の学生の誰かに頼んで自分の言うことを中国語で話してもらって理解させることも何回か行わざるを得なかった。

締め切りは２４日(水)正午だったが、そこに間に合わせるのが至難の業だった。学生の日本語をすべて完璧に直さない方がいいという考え方もあるが、自分としては彼らにとって自分で努力して書いた文章を直してもらう作業が日本語の書く能力を習得するための最上の機会であると考え、可能な限り、よい日本語に直すよう努めた。

なんとか２４日(水)の正午までに提出させ、その日の午後から発表原稿の添削を行った。２５日(木)には５時までには添削が終わらず、夜になり、その建物の門限の９時半近くまで添削を行ったが、すべて終わることができなかった。学生は待ち時間に夕食を済ませたが、自分は夕食を取らないで添削を行っていたところ、学生が菓子パンと水を持ってきてくれた。

２６日(金)の１～２時限目でなんとか、添削を終了し、続いて発表練習に移った。当初、一人２回ずつ練習をさせたいと思っていたが、１回しかできなかった。しかし、１回目にしては、原稿を直しておいたためか、スムースに発表でき、これでなんとかなりそうだという感触を得た。学生には発表では原稿を読まないで、パワポのスライドをきちんと指しながら発表出来るよう、練習しておくように指示した。４時頃発表練習を終えたが、２人の学生が残っていて、さらに質問があるようだったので、それに答えたりしていたら、終わったときには６時を過ぎていた。バスに乗り損なったが、まだＳ先生が残っておられたので、一緒にタクシーで宿舎に戻り、夕食を共にすることができた。

（３）学生との交流

１週目の金曜日（８月１９日）にレストランを予約してもらって、学生を招待した。レストランまではタクシーに分乗して向かった。出身地のこと、将来の夢などで話が弾んだ。帰りは全員で歩いて宿舎まで送ってくれた。８月２９日(月)、最終試験が終わってから、今度は学生達が招待してくれて、大学からそれほど遠くない〇〇賓館で、夕食を共にした。学生との交流のためにいい機会であったと思った。翌日の「教師団と学生との晩餐会」でもさらに交流を深めることができた。３０日の修了式の後には、２人の学生が代表して自分のところまで挨拶に来てくれた。

（４）感想など

筆者は１７年前の１９９４年８月に１ヶ月間、同プログラムに参加したが、そのときの市内の様子や宿舎を思い起こして、この間の長春の発展ぶりに驚きかつ感慨を深くした。当時の宿舎の水道水は黄色く色が付いており、それは途中の破損した水道管から土が流入しているため、という話だった。日本から持参した浄水器を取り付け、煮沸して飲料水としたが、洗濯の水までそうする訳に行かず、洗濯物はみな黄色く着色してしまった。道路は舗装されておらず、街全体が埃っぽく、子供の頃の日本に戻ったような気がしたものである。朝夕、多くの自転車が道路を走っていたが、今回は自転車は影を潜め、市内の到る所で車の渋滞が見られた。当時、メールの通信状況が不安定で、ＦＡＸも朝早くか夜遅くでないと、送信できなかったように記憶している。当時、発展にインフラが追いついていない、という印象を持ったが、今回も状況は大きく変わったとはいえ、インフラの問題は変わらず存在し、宿舎は見違えるほどきれいになったにもかかわらず、水はけが悪く、風呂は結局シャワーで済ませたこと、コンセントの接触が悪く、テレビが見られなかったなど改善の余地があると感じた。夕方や土日などは、宿舎の近くの街中を見て回ったが、どこも混雑していて活気があった。

今回は１７年前に比べると相当に過密なスケジュールだったが、助手の人（４年生のＹさん）にお願いして、昼休みに毎日３０分間、中国語のレッスンを受けた。当初、簡単な日常会話を習うつもりだったが、それは止め、「静思夜」、「早発白帝城」、「春望」など、いくつかの漢詩にピンインを振ってもらって声を出して素読を繰り返し、読み方を習った。中国語の発音は難しいが、興味深く、楽しいひとときであった。

そのほか、今回いろいろな先生方にお会いできたことも楽しい思い出となった。過密なスケジュールに追われる日々だったが、それでも夕食の時間などにいろいろな方から興味深いお話しを伺うことができた。北大阿部先生の口琴という楽器の演奏を初めて聴くことができ、学生との交歓会では自分のフルートと合奏することができた。また、送別答礼宴では副校長で二胡の名手であられる鄭先生に誘われて、二胡とフルートで「浜辺の歌」を合奏することができたのもよい思い出となった。